

第5章 基本語彙活用編

これまでは敢えて「京大の英作文」といっても実は基本事項で解けることを強調してきたが、もちろん日本一の英作文問題を出題する大学であるから、難解な表現も登場する。この「難解」という意味は次の二つに分析できる。

1. 「日本語そのものが難しい」場合
2. 「直訳するだけでは具体的に何のことかよくわからない」場合

前者は日本語自体をパラフレーズすることで解決する。例えば「重い手応えのある本」(§63)なら「私に大いなる影響を与えた本」、「心の琴線に触れ合う」(§64)なら「互いの気持ちがよりわかり合える」、「一端がうかがわれる」(§66)なら「少し理解できる」という具合にすればよい。また、多少ニュアンスは異なっても、知らない語彙を振り回すよりは、知っている語彙を頼りに、課題文に近い表現で逃げるという手もある。「うるおいのある社会」(§59)は「住みやすい社会」に、「絆が深まる」(§65)は「互いに近しく感じる」くらいで十分だろう。

後者の「直訳するだけでは具体的に何のことかよくわからない」例として、「人間そのものは社会的、経済的地位のかけにかくれて、かすんでしまいがちである」(§59)、「生産的な精神をはぐくむ」(§61)などである。こういうときは前後の文脈を確かめることが肝要だ。§59の例は次に「もっと個人の魅力に基づいた人間関係を築き」とあるから、「(今の社会は)人間の魅力よりも社会的地位を重視している」と意識できる。§61は前半に「身体を発達させ」とあるから、まとめて「心身ともに発達する」とすれば済む。この方策は次の第6・7章でも考えることになる。